

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.48

平成26年8月31日

開かれた能楽連盟に

会長 馬場 洋一



今年4月の総会において、横浜能楽連盟の会長を拝命いたしました。連盟は昭和23年の創立ですが、小生は昭和24年の生まれ。連盟初の「年下」の「若造会長」ということになりました。そろそろサラリーマン人生も終わりに近づいておりますが、ありがたいことにまだ現役です。そんな私がこのような大役を仰せつかり、身の引き締まる思いでおります。

昨今、「観能が趣味」という方が増え、ご自分でなさるといふ「能楽・謡曲愛好家」は減っています。時代が変わり、能楽も横浜能楽連盟も、岐路に立つ

ているのではないのでしょうか。謡曲愛好家が増え、その人たちに会員になっていただくことが、能楽連盟の発展、ひいては横浜での能楽の普及・発展に与するのだらうと思います。

では、そのために何をしなければならぬか。それは、①質の高い能楽に触れる機会を増やす、②能楽・謡曲への敷居を低くする、の二つだろうと思います。

①については、横浜能楽堂と共催の「横浜能」を行っており、今年61回を開催しました。横浜能楽堂が開館してからは、横浜能の実質運営はお願いしていますので、これについては連盟としても変わらず協力してまいります。

②が一番の課題です。高齢化が進み、会員が漸減している中では、若い方々や観能が趣味の方々に、「やつてみたい」と思

ってもらうことが第一歩です。「素人の能楽の楽しみ方には、演能、仕舞、素謡等いろいろある。自分なりの楽しみ方を見つけよう」ということを知っていただければよいのです。そのためには、広報や、興味を持たれた方への対応などを、一層工夫して進めたいと思います。

次に、横浜能楽連盟に加入していただくためには、連盟自身の努力が必要でしょう。わかりやすく、開かれた組織運営、広い視野を持った広報活動などを、積極的に進めていく必要があると思います。

藤本前会長は、26年間務められた新堀名誉会長の後の舵取りを4年間なさり、組織改革をされました。「孫子に伝えていくのが使命だ」と、常々おっしゃっておいででした。「孫に頼まれた」と、最近はお自宅で小学生のお孫さんに謡と仕舞を教えていらっしゃるそうです。「自分で言ったことは自分で実践しなきゃね」と嬉しそうです。

一方私は、愚息に「結婚披露宴に高砂を謡ってやる」と申しましたら、「それ何？詩吟？」と問われた。苦い経験があります。「孫子に伝えていけないじゃないか」と、お叱りを受けそうです。

こんな頼りない私ですが、諸先輩の作り上げられたものを継

承しつつ、わかりやすい、開かれた連盟づくりに努力してまいりる所存です。時代の変わり目を乗り切るには、強固な組織力を発揮せねばならないと思っております。各流派、各役員、そして会員の皆様のご協力が不可欠です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

連盟報告 (25年度後期)

企画事業担当 青山 圭佑

一、「第17回五流交流のつどい」中止について

平成26年2月15日(土)開催予定にて、担当幹事金剛流が準備を進めていましたが、前日は降雪で大雪予報も出たため、会長・担当流派幹事・事務局が集合して協議し、天候の成り行きによって当日の朝、開催の可否を決めることとしました。当日は近年にない大雪となり、藤本会長の決断により中止と決定しました。

横浜能楽堂及び相生が費用の免除を認めてくれたため、出演予定の会員より会費の徴収は行わないと決定しました。番組作成等、準備済の費用は連盟が負担しました。

なお、このような状況等から2月開催は如何なものか、との

意見が以前よりあり、それを反映して平成27年の「第18回五流交流のつどい」は、3月14日(土)開催予定となっています。

二、平成26年度総会・役員改選について

平成26年4月22日(火)に総会及び役員改選が、横浜能楽堂2階レストランにて行われました。出席会員35名委任状296名の計331名にて総会は成立しました。横浜市文化観光局文化振興部長の祝辞、能楽堂担当者の挨拶があり、藤本会長を議長として、25年度活動報告・決算報告・監査報告が行われ、26年度の活動計画・予算案が提出されて、それぞれ了承されました。

また、役員改選の時期に当たり、藤本会長、吉田副会長より退任の意向が出されました。出席理事の互選により、新会長に馬場洋一(喜多流)、副会長に井實昭子(観世流)、小林美佐子(宝生流)、青山圭佑(観世流)の各氏が選出され、総会にて承認されました。藤本会長は顧問に就任されました。

三、会員の動向

平成26年6月1日現在、個人会員443・団体44・企業1の計488。25年4月より15増加していますが、会員の高齢化により楽観はできない状況です。26年度より白謡会が加入しました。当面は6名の新入会です。

初めてのお能

観世流梅若会 内倉 和雄

私が師である堀内万紗子先生と初めてお会いしたのは20代後半だったと思います。お仕舞から始めましたが、最初はラジオ体操のような動きだったのではないかと思います。初めて舞ったのは銀座能楽堂の舞台で「熊野」でした。その時の舞は全く思い出せませんが、後で堀内先生から「足をカケる時の足の動きがきれいですね」と褒められたのが嬉しくて忘れられませんでした。お稽古に伺えない時は、録音したテープによる通信教育をしていただきました。稽古不足を見破られ、今日はちょっとご機嫌斜めだなと感じることがあったても、言葉で叱られることはなかったように思います。

また、初めての舞囃子は2001年の「八島」で、東中野の梅若能楽会館の舞台でした。熊野の時ほど緊張はしなかったと思いますが、終わって切戸を出たところで梅若泰行先生にお礼のご挨拶をした時に「百点満点」とのお言葉を戴いて驚き、嬉しさで思わず涙目になったのを今でもはつきりと覚えています。

2011年には65歳で定年を迎え、少しは時間に余裕が持てるかなと思っていたのですが、思うようにはならず、相変わらず

ずのスローペースでの稽古になっ
ています。そんな中、お能を
してみないかとお誘いがあり
「やります」と言っ
てはみたものの、稽古を始めると自覚して
いる以上に記憶力の低下を実感
させられ、軽率だったかなと思
うこともありま
した。梅若長左
衛門(靖記)先生、堀内先生に助
けられてなんとか稽古を進め、
本年2014年の4月に横浜能
楽堂で開催された梅靖会で「清
経」を演じました。初めての能
でしたが、舞い上がるような緊
張感ほとんどなく落ち着いて
できたように思います。長左衛
門先生に「良かったよ」とうかが
った時は、嬉しさとホッとした
気持ちでいっぱいでした。終了
後行われた懇親会でのビールの
味は格別のものがありました。

め、週2回稽古に通っています。
ご承知のとおり、太極拳は中
国古来から伝わる拳法であり、
もともとは武術であったものが
現在では医療体術として行われ
ており、まさに心と体の健康を
体得する「健康太極拳」として
愛好されているようです。私も
まだ始めたばかりでよくはわか
りませんが、その要点を聞きか
じりのままいくつか列記すると、
次のような事柄がポイントとし
て挙げられているようです。
①意識的にへそ下に気を集中さ
せることで、自然に背はピー
ンと伸び、腰が安定し、精神
が統一される。
②肩に必要以上に力を入れない
で、手と足のバランスを大切
にする。
③足を踏み出す時は、腰が安定
していないとぐらついてしま
うので、腰に重心を置いて太
ももの所から動かす。
④背骨を真っ直ぐ伸ばすと、胸
がゆったりとして呼吸がしや
すい。

太極拳を始めて思うこと

宝生流 木内 吾郎

最近、高齢者を中心に太極拳
が静かなブームになっているよ
うです。実は私も数年前から始

ようがありません。それを少し
でもカバーし、老化防止・体力
増強に役立てようとのささやか
な期待感から始めた太極拳でし
たが、稽古が進むにつれ、その
意図するところに、そのまま謡
曲や仕舞に共通するものが多々
あるのではないかとということが、
多少なりとも理解できるようにな
ってきました。

謡を謡う時の座り方や身構え
もそうですが、とりわけ仕舞を
舞う時の姿勢や体の移動等に関
して、大変参考になっています。
長い間謡曲や仕舞の稽古を続
けてきましたが、これからも今
までどおり元気で楽しく稽古が
続けられるよう、「健康太極拳」
共々精進を怠らないように頑張
っていきたいと考えています。

謡曲「海土」と雲洞庵

観世流 青山 圭佑

新潟県南魚沼市の名刹「雲洞
庵」(曹洞宗)は、謡曲「海土」と
深い関係があります。「海土」に
登場する房前大臣(藤原房前)
の実母「先姥尼公」が1300
年前に尼として雲洞庵を開いた
とされており、平成24年に先姥
尼公の1300回忌追善が雲洞
庵で行われることとなりました。

そこで、当日「海土」に関す
る能楽を雲洞庵の本堂にて披露
できないかとの話が、白謡会六

日町支部にありました。白謡会
の主催者である平戸仁英氏が六
日町に出稽古の際に相談を受け
たもので、会として引き受ける
こととしました。

平成24年9月27日(木)午後6
時より、素謡・仕舞・舞囃子を
「海土」尽くしで、本堂の祭壇
前にて150名以上の観客を前
に披露しました。なお、開演前
に雲洞庵の住職と出演メンバー
が先姥尼公の墓前に詣で、13
00回忌の供養を行いました。

当日の素謡は白謡会の参加者、
仕舞は六日町支部の石井佑子
さん、舞囃子は平戸仁英氏、囃
子は横浜医師会能楽部の方々、
地は白謡会のメンバーでした。
観客には能楽が初めての方も多
く、感銘を受けた、このような
催しを今後も行って欲しい、と
の声もありました。

なお、雲洞庵は曹洞宗の総本
山永平寺に次ぐ格の名刹で、永
平寺の管主は雲洞庵から出ずの
が慣例となっているそうです。
藤原房前の父は藤原不比等、祖
父は藤原鎌足ですから、先姥尼
公が開いた雲洞庵が格の高い名
刹とされていることも納得でき
ます。また、上杉景勝と直江兼
統が幼少時に修行した寺とし
て、NHKの大河ドラマにも登
場しています。

能舞台をつくる

喜多流 渡辺 範夫

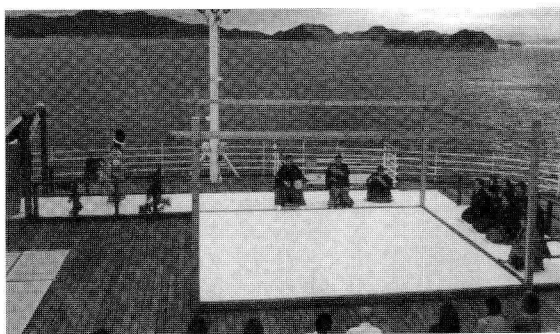
もう20年も前のことになりましたが、能舞台を実際につくったことがあります。場所は、海に浮かぶ船の上でした。

当時勤務していた塾で、平成6年から3年間、夏に「にっぽん丸」という客船を借りて、生徒たち（小中高大）はもとよりご縁のある方々をお誘いして旅に出ました。最初の年は、三つの中国クルーズと題し、厦門から香港、台北を巡る旅。2年目は小笠原へ行き、最後の年はよさこい祭りを見て、済州島、瀬戸内海を巡る旅でした。

昭和の終わり近くに、みんなで謡を習うことになりました。これが出雲先生との出会いです。声の大きさだけは負けまいとどなり上げるばかりの我々を、よく我慢して指導を続けていただきました。にっぽん丸のクルーズ計画が持ち上がり、お能の先生方にもお乗りいただくことになった時、船内のホールではなく、潮風が吹き抜けるデッキでお能を演じていただくことになったのも、自然なことでした。

京間三間四方の能舞台を船の甲板につくる、という取り組みがスタートしました。ただ、つくるといっても借り物の船です

から、傷つけぬよう部材を運び込んで組み立て、解体して元に戻すということができなかった。浅草のあるホテルから、使わなくなったダンスホール（1台30キロ！）をいただき、これを敷き詰めて上にテントシートをかぶせ、四隅に柱を立てるといふ案が固まりました。下の枠は赤く塗り、上のハチマキは金色に塗りました。橋掛かりもボルト・ナットで組み立てられるようにし、揚幕は人力で支えて、何とか能舞台らしきものが出来上がりました。



▲瀬戸内海の夕照を背景に舞台の幕がいたところ

伝統を継承して

いくために

金春流 長倉 毅

私たち綱雄会の師が横浜能楽連盟のことを話してくださったのはもう何年も前のことです。が、参加することになったのはごく最近でした。五流大会やつどいなどの行事に出演するに至っては、ついこの間のことなのです。

参加するに当たって、また参加してから、一つ困ったことがあります。それは、横浜能楽連盟そのもののくについて、その詳細と言いうるだけのものを誰も説明してくれず、全く無知な状況で仕方なくスタートを切ったことです。

致し方なく、連盟の資料はないかと探してみても、50年目の記念誌というのに行き当たりました。もう手に入らないため、国会図書館に足を運び、どうにかコピーを手に入れました。興味深い内容が数多くあり、すべてに目を通すのは難しいことでしたが、我々の参加の意義を明らかにするために必要な作業でした。戦後すぐからの、市井の能楽団体としてはとても古い歴史のあるところなのだ、この時ようやく具体的に知ることができました。

知ろうとしなければ知ることができず、実際に触れるためには対価と時間を大変に費やすことになるというのは、能楽のみならず、多くの伝統芸能がおしなべてぶつかっている課題だと聞きます。こうも知りにくくなっているのは全くもったいないことで、様々な方に知られるべきだと思えます。私自身ももっと知る必要を感じています。

その知るに至るまでの道のりが難しいままになっている。このことは、私のような比較的若年の者にとっては大きな壁となつていきます。ここに道案内としての役目を引き受けることが、今の私の使命なのだろうか。などと思うに及びます。能楽に関わるいろいろな方と知り合ってきて、同じような気持ちの方も多くおられるのではないかと感じます。

私は、師の社中のほかにも、出身大学の能楽部で稽古に勤しむ学生と交流をしています。そういうつながりからも、初心の立場にある方々との関わりも大事にして、知るべきことを伝え、守り、日々の稽古を続けて行ければと思います。

2月の「五流のつどい」には私の後輩たちも出演するはずでしたが、積雪により中止になってしまい、残念でした。またいずれ、今度は私から機会を作つ

てあげたいものです。これから、こういった取り組みに皆様のご賛同やご指導をいただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

能の同（音）と地（謡）

地謡の変遷

金剛流 齊藤 隆

表章先生（注）の「能楽研究講義録」（平成19年夏の阪大大学院での集中講義、笠間書院）の中に、先生が「国語と国文学」（昭和60年4月号）に初めて述べられた、同（音）と地（謡）の区別と変遷についての記述があり、大変興味深い内容ですので要約して紹介します。

『昔の謡本を見ますと、「地謡」が謡う所を、「同」と指定したり、「地」と指定したりしています。その区別が昔から論議されていましたが、納得できる答えは出ていませんでした。

私はそれを整理し、本来は主役が謡うはずの文句を合唱者が代って謡う所の指定が「同（音）」であり、本来は主役以外の人が謡うべき文句を合唱者が代って謡う所の指定が「地（謡）」だと説明したので。

一 同音・現在の地謡が謡っている文句は大半が本来は主役（ほとんどはシテ）が謡うはず

の文言です。そこを昔の謡本は「同」と指定しました。主役が謡う声がよりよく聞こえるように、他の人たちが声を合わせて謡ったのです。「他の人」とは立役全員です。地謡は、能の大成期にはまだ登場していません。

二 主役の同音からの撤退…まず主役が同音から撤退するようになり、演技しながら「謡う」ことが困難になったので、どちらも重くなったのでしよう。

三 地謡の登場…ワキやツレだけでは声が足りないので合唱だけを担当する人も舞台に出て謡うようになりました（世阿弥晩年）。それが地謡で、合唱の統率者は室町末期までワキでした。

四 ワキ謡を地謡が同吟…ロングの部分で主役と交互に謡う所など、もともとワキ役が謡うべき文句もあり、それにも謡をよく聞かせるために地謡が声を添えました。それを謡本は「地」と指定しました。

五 ワキがその「地」の合唱から撤退したのは江戸後期になつてからのようです。

主役に続いてワキも合唱から撤退したことが「同」と「地」の区別を不明瞭にしたのであり、その差は地謡の変遷を考慮しつつ究明すべきだと主張したので

す。世阿弥が合唱専門の役者が舞台上に登場する形を嫌っていた『申楽談義』の記事などから把握できる）ことなどを総合して、試案を提起した論考でした。」

表先生の論考やその後の研究を基に、今後、ワキ役が「地」を謡ったり地頭を務めたり、または能の大成期のように、地謡無しでの立役だけの能を再現するような試みがあれば、ぜひ鑑賞したいものです。

《注》表章（おもてあきら）

能楽研究者。1927年4月〜2010年9月。北海道稚内市出身。東京文理科大学卒、政法大学名誉教授。2010年6月能楽史の研究で恩賜賞・日本学士院賞受賞。

下懸宝生流の謡と私

下懸宝生流 藤田 忠弘

下懸宝生流は、江戸時代に徳川家より許されて春藤流から宝生座付きのワキ方として分派し、一流を樹立しました。春藤流は金春流から出たワキ方の流派で、金春流は下懸りですので下懸宝生、またシテ方の宝生流に対してワキ方の宝生流ということになってワキ方とも言われています。

謡本は各流派と同じ構成になっており、お稽古も同様にシテ・ワキ・地謡を謡います。

現宗家は、第12世宗家人間国宝の宝生閑先生です。先々代の

宝生新先生、先代の宝生弥一先生も人間国宝でしたので、3代続いている人間国宝です。夏目漱石の『我が輩は猫である』の冒頭「先生」が廁の中で「これは平の宗盛なり」と謡っているのが下懸宝生流の謡です。漱石自身下懸宝生流の謡を宝生新先生に習っていました。

私は早稲田の学生の頃から当流を謡い始め、今年で54年になります。現在は宝生閑先生に個人稽古をお願いしており、江古田のご自宅の能舞台横のお稽古場に月2、3回お伺いしています。閑先生のお稽古では、先生のお能とお謡の限らない広がり

と深さを覚えるばかりですが、その一端を垣間見たり触れたりできる喜びは何にも代え難いものがあります。下懸宝生流の謡は、強弱がはっきりしている、力強さと優雅さの両方を持っていると言われていますが、いまだになかなか思うように謡うことはできませんが、お稽古の際に閑先生の謡を直接耳にすることができるとは嬉しい限りです。

地域活動の一環として、5年ほど前から謡曲教室を開いています。現在は2教室11名の方に謡を楽しんでもらっています。先発教室の5名は、2年前から「五流のつどい」にも参加しています。後発教室の6名も、平

成27年3月のつどいから参加できよう、現在稽古に励んでいます。

私が弥一先生・閑先生からお稽古していただいた曲数はおよそ120番になります。当流には内の100番、外の80番、重習4番があります。重習の4番以外はお稽古可能ですが、現在の私は新しい曲よりも復習したい曲が多くあり、先生に2回目3回目をお願いするようになっています。10年ほど前からは1年1曲無本習得を個人的に目標にしており、現在8曲達成しておりますが、謡わないとすぐに忘れてしまい、無本維持に追われています。

能楽堂だより

26年度11月以降の公演案内

26年11月〜27年3月の横浜能楽堂の公演予定は次の通りです。このほか毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演」横浜狂言堂「」を開催いたします。

第31回横浜かもんやま能

11月22日（土）午後2時開演

解説 笠井賢一

狂言「鬼ヶ宿」（大蔵流）茂山正邦

能「竹生島 女体」（喜多流）

S席四千元／A席三千五百円

／B席三千元

チケット発売日

9月20日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）

企画公演「明治八年能楽の曙光」

12月23日（火・祝）午後2時開演

狂言「狐塚」 野村万蔵

能「蟬丸」宝生和英 梅若玄祥

S席七千元／A席六千元／

B席五千元 チケット発売中

特別公演

平成27年2月21日（土）

午後2時開演

狂言「石神」（大蔵流）善竹忠一郎

復曲能「綾鼓」（観世流）

浅見真州

S席七千元／A席六千元／

B席五千元 チケット発売日

11月8日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）

普及公演「バリアフリー能」

平成27年3月21日（土・祝）

午後2時開演

お話 本田芳樹

狂言「文荷」（大蔵流）山本泰太郎

能「巻絹」（金春流）高橋忍

S席四千元／A席三千五百円

／B席三千元

※介助者1名まで無料

チケット発売日

12月20日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）

横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 倉藤

TEL〇四五―八三五―一三六

◎横浜能楽堂

TEL〇四五―二六三―三〇五〇